

災害研究における二、三の問題

＜気象災害シンポジウムを中心に＞

三 寺 光 雄*

1. はじめに

「天災は忘れたころにやってくる」そうした名言は、もはや迷言にかわりつつある。わが国における、最近の災害の状況は、何年に一度起きるかといった確率的な問題をこえて、それは、年中行事になっているからである。「異常な天然現象による災い」としての災害はその用語に含まれる「異常現象……」が中軸となる故に、それはきわめてまれにしか起きないものとしてさげがたいものと考えられたのであろう。なるほど異常な天然現象は災害の主導因であるが災害の基底となるべき人間社会のあり方をぬきにしては災害そのものの意味があいまいになる。従来この種の調査研究は異常な天然現象に重点がおかれたものが多かったがそれは災害そのものの本質をそらすものとならざるをえない。故寺田寅彦博士は、その随筆のなかで、災害は文化の発達をもたらした災禍であるという意味の名文を残されたが、これこそ災害の主要な側面をいい表わしたものといえよう。

2. 災害調査の問題点をめぐって

災害の研究調査において私の主張は、どのような基底(社会)のもとで異常な天然現象が起きたかということが、災害に関する認識の立場でなければならぬということである。

1960年10月28日、気象学会主催によって、気象災害に関する講演会ならびにシンポジウムがもたれたが、上述の立場から、その会に出席した者として1、2の感想を述べてみたい。

神原氏は、気象災害を量的にとらえることは可能か? という論説を発表し、「災害による被害額は結局受益代表によって報告されているために信用できないとし、ただ、その中で警察の災害による死亡報告が客観的な資料となるだろう」という意味のことを述べられていた。渡辺次雄氏は「気象災害系研究における位相幾何学的研究」において、災害の研究方法として位相幾何学が複雑

な災害現象を正しく分析するためのアプローチとして、災害現象の正確で客観的なあり方を把握する方法として有効であることを強調された。正務、毛利氏は、「中部日本における DDA 曲線と災害(水害)の規模について」と題し、災害規模の評価の方法の一つとして、災害による幾つかの被害を統一された指標におきかえることによって(DDA 曲線)災害の規模を論じられた。肥沼氏の災害の変化は災害にもとずき、災害の発生頻度の吟味から時代と共に増加する災害(風水害)と減少する災害(地震、火災、旱害)があることを指摘された。斉藤氏は府県災害年表からみた過去の災害記録についてと題して気象災害史の資料の分布状況を明らかにされた。この他に、台風の風(渡辺和夫氏)や、日本における可能最大風速について(高橋浩一郎氏)があったが、ここではふれない。

午後におけるシンポジウムでは、高橋行雄氏が農林省における統計調査組織を中心として、水稻の被害調査の方法が述べられた。金子行雄氏は公共事業施設だけではなく、公共事業の投資の経済効果について話題提供が試みられた。また石井素介氏は、人文地理的な立場から災害調査の方法が述べられた。吉野正敏氏は自然地理の立場からその調査法が論じられた。(以下、久保氏と奥田氏の話は都合によって聞く機会を失ったので、ここでは述べない)。いずれ話題提供者のそれぞれの内容の詳細は執告されると思うので以上の午前の講演と午後におけるシンポジウムを通じて幾つかの問題をあげたい。

i. 災害資料の問題について

確かに神原氏がいうように、現在の社会機構のもとでは客観的な資料を得ることはきわめて難しい。神原氏は正確な資料は災害による死亡報告(警察)だということ。ところで、氏の災害資料とはいかなる内容のものなのだろうか、そうしたことについては、ふれられていない。氏の言うように災害資料の報告が受益者によってなされている現状では、確かに不正確であり現実の災害による被害の程度を正しく反映してはいない。だが、そうかといって死亡報告がより正確な資料と言われることに

* 気象研究所応用気象研究部

問題が残されよう。死亡統計はたしかに正確ではあるが、そこでは災害そのものの資料としての情報価値は極めて小さい。そうした点を考えれば、水増しされた報告資料は不正確ではあるが情報価値は死亡統計より小さいとは考えられない。正務、毛利氏は災害資料について直接触れているわけではないが災害高の一元的表示が、その底流となっている。DDA 曲線は実用的な面からの要請ではあるが、災害による被害の異質なものを同質なものとして取り扱っているところに無理があり、更には災害地域の量的な規定に成功しても、一面質の問題がこぼれ落ちると言う点が残される。

災害における資料の量と質の問題については、極めて重要な問題であったにもかかわらず、シンポジウムでもその点が触れられなかった。ただ石井素介氏が、話題の中で若干触れたにしかすぎない。

ii. 災害調査の立場

今回の講演ないしシンポジウムの内容を通してわかることだが災害への関心の程度はそれぞれ異なっており、それだけではなく災害とは何かそうしたことについても十人十色だったのではないかとさえ思われた。それは災害全書(昭28)にも述べられているように、災害の定義が一致していないことからとも言えるであろう。

かりに、ここで災害とは何かと言うことについてはこの会に集まって来た人々の了解事項として進めたにしても、災害調査の問題点としては、「その立場」は極めて重要である。

われわれの調査は単に客観的な資料を得るために調査されるのではなく、多くの場合、目的があり、それにそって行動が試みられる。

その場合AとBの資料が異なったからと言ってそれは客観的ではないとはいえない。その違いは、むしろ立場の違い、したがって立場のちがいがらくる評価のちがいなのである。

今回の討論では資料の客観化といったことについては意見が述べられたが、評価の問題については討論が進まなかったのは、こうした問題をテーマとしたシンポジウ

ムとしてはきわめて片手落ちだったように思われた。

iii. 気象災害の研究方法

気象災害という用語は、一般にいわれる災害とどのような点でちがうかはっきりしない。しかしここでは災害の主導因が異常気象であるという意味において使用した。

渡辺次雄氏は、気象災害の研究方法として位相幾何学を取り上げられた。このことは渡辺氏の演題にもあるように気象災害系の概念、そうした系概念から当然一つの方法的な手段として、位相幾何学の導入は考えられることである。たとえば、ファラデーが電気や磁気の現象について、電荷体に作用する力が電荷体そのものにあるのではなく、それを中に含む周囲の媒質にあることを発見することによって、場の理論に、位相数学が考えられたように、また心理学でもその方法として場の幾何学が問題とされる。(たとえばトポロギ心理学の如き)ところで渡辺氏の、きわめてすぐれた方法論も果して災害の研究に適當であるか?、レヴィンはその著書[Field Theory in Social Science 1951]において、「……形式的定義、仮定および、演繹、更に幾何学的にある着想を示すことは早まったことであろう」という。渡辺氏の講演をきいた範囲においてレヴィンのそうした批判はここでも通用するのではないかと思われた。

3. むすび

以上述べた2, 3の感想も結局は、災害そのものの認識のちがいによるのであろう。われわれは「災害から国民を守る」ことについて考えるならば、立場の相違(階級的なちがいはなく)をすてて「災害から国民を守る」という考え方に立つことが基本的に要請されるのではあるまいか、わが国における幾つかの災害論も、研究結果も政治的貧困が災害対策をして悪循環させていることを指摘したものは少ない。そうした意味で、今回のシンポジウムも資料や調査方法についての論議はあったが災害の基底である社会そのものについての性格の分析が抜けてしまったのは残念であった。

—29頁よりつづく—

山岸米二郎(2) 後町幸雄(1) 中野道雄(1) 一色光雄(1) 板東丕(1) 海部佳明(1) 中村春雄(1) 青木政好(1) 小川泰平(1) 浅井正雄(1) 森田高明(1)

1,350円 柴田淑次(2) 菊地徹夫(0.5) 内海徳太郎(1) 吉田泰治(0.5) 和田英夫(2) 草野和夫(2) 安藤正次(1) 吉田作松(1) 野口和則(0.5) 角野迪夫(1) 関根勇八(0.5) 小林勉(0.5)